上条報告

第２１号
平成23年2月

甲州市教育委員会
☎32 - 5097

上条地区まち歩き（ふるさと景観フットパスプロジェクト）が開催されました

一月二十三日の日曜日に、甲州市政策秘書課が事務局を務める「ふるさと景観フットパスプロジェクト」の「まち歩き」が、上条地区で開催されました。フットパスとは耳慣れないことばですが、普段自動車などで通り過ぎてしまう何気ない風景を、歩くことによってつぶさに再確認し、その地域の良い点や悪い点を見直そうという取り組みです。

甲州市では来年度に「景観計画」を策定します。そのため、本年度は市内各地でフットパス（まち歩き）を開催し、参加者からその地区の特徴を引き出し、良い点、悪い点を検討しながら、各地区および全体の景観計画と形成についてまとめて行く予定です。

今回は、フットパスプロジェクト関係者に市役所職員、それに大勢の地元の方々にもご参加いただき、総数二十五名ほどの規模で開催できました。政策秘書課の話では、これまでで最多の参加者だったそうです。ご参加くださった方々に改めて御礼を申し上げます。

一月二十三日午後一時に福蔵院へ集まり、事務局から資料として上条地区の地図が手渡され、歩きながら良い景観、悪い景観などをその地図に書き込む旨、説明がありました。簡単な開式行事を済ませ、福蔵院の駐車場から本堂へ移動し、木食白道作の百体仏などを見学しました。以後説明は飯島が行いました。

福蔵院では百体仏のほか、ご本尊の不動明王立像を興味深く見学されていました。また、本堂はもともと東側にあった不動堂を移築・増築したもので、不動堂の名残が護摩を焚くご本尊の周囲にあることのお話をしました。

福蔵院を出て、仁王門をくぐり、参道から金井加里神社へ向かいました。神社の随身門前で一旦振り返り、二子山と上条集落の始まりについて説明しました。二子山の重川側に中村弾左衛門という金山衆の屋敷があり、その中村氏が二子山の鞍部を越えた先に集落を創ったという「七屋敷伝説」で、そのため上条地区では中村姓が多いというものです。金井加里神社では、主に本殿を見学しました。二間社という構造は非常に珍しく、また、屋根の三面千鳥破風も非常に美しい、洗練された本殿建築であることを説明しました。三面千鳥破風は江戸中期頃に流行しますが、それらと比較してもはるかにバランスの取れた屋根です。

台地の尾根を通り観音堂へ向かう途中、最もよく知られている上条集落のビューポイントでしばし集落を眺めました。いつ歩いても、この尾根筋には神秘的なものを感じます。こんな地形を創り出した神様に対し、畏怖と敬愛の念を抱いて造営したのが、観音堂や金井加里神社、福蔵院ではないのかと考えてしまいます。その宗教施設を眼下に見下ろす上条集落とは、ある意味「聖域」とも言える場所ではないのかと。

観音堂では、地元の方々も集まっていただきました。組長様のご好意で一木百観音も見学できました。表側は写真でも見られますが、背面にびっしり観音様が彫られている様子はここでしか見られず、参加者もびっくりしていました。

その後、道祖神場を経て一仁さん宅を訪ね、防空壕にも入ってみたり、太丸さん宅を見ながら情報館へ向かい、情報館にて協議を行いました。

情報館ではＮＰＯの柳通さんが囲炉裏で火を焚きながら、私たちを迎えてくれました。柳通さんの説明を聞きながら十分に暖をとった後、リビングへ上がり車座になって本日のまち歩きの感想を出し合い、協議を始めました。

協議では、まち歩きのときに各自に配布された地図の大きいものに、良い所、悪い所を記入していく作業から始め多くの意見が出されました。参加者の中には、初めて上条地区を訪れた人もいて、風景のよさに感心していました。

甲州市では、今回の成果も含めて市にマッチした景観計画を策定します。その過程で再度皆様方のご意見をお聞きすることがあるかもしれませんので、よろしくお願いいたします。

一月十六日、前日愛知県新城市で「武田勝頼の墓発掘調査報告」という講演を済ませ、豊川で一泊した後、雪降る山間部をひたすら北上し、旧岩村町本町通りを見てきました。岩村町本通りは商家町ですが、もともとは戦国時代の山城・岩村城の城下町です。

恵那市岩村町本通り（商家町）

所在地	岐阜県恵那市岩村町
種別	商家町
条例制定年月日	平成五年六月二十八日
選定年月日	平成十年四月十七日
地区面積	約十四・六ヘクタール
保存物件数	
建築物	一一四件
工作物	二三件
環境物件	五件

高台から見た伝建地区。城下町らしい風景です。

伝建地区の枡形付近。ここで町並みが変わってきます。

岩村町本通りは岐阜県恵那市に所在しますが、合併以前は恵那郡岩村町でした。

岩村にある岩村城は、かつて武田信玄の家臣・秋山信友が入城したことがありますが、長篠の合戦で武田軍が大敗すると同時に織田軍に渡りました。海抜七一七メートルに位置し、日本の山城の中で最も高地にある城です。

現在の町並みは、慶長六年（一六〇一）に岩村の初代藩主となった松平家乗が、新たな城下町として建設させたものといわれています。保存地区は東西延長約一・三キロメートルを測り、ほぼ中央に枡形（クランク）があります。この枡形より東側と西側で、大きく二つに分かれます。

枡形より東側の地区は、江戸時代から商家町として栄え、今でも当時の建造物が数多く残っています。町家の敷地は間口約四間、南北に長い短冊形の敷地割で、中庭には天正疎水と呼ばれる水路が保存地区を縦断するように通っています。建物は江戸時代に建築されたものが多く、主屋のほとんどは木造二階建・切妻造・平入で、全体として軒の低い家並が続きます。

岩村城東曲輪。雪だらけです。

枡形より西側の地区は、江戸時代末期から順次発展し、明治三十九年の岩村電気軌道の開通により一層繁栄し、今も岩村町の商業の中心地となっています。建物は、明治以降の切妻造・平入・桟瓦葺が主で、枡形より東側の地区に比べて全体に軒の高い二階建の主屋が多く、明治以後、住宅の二階部分が重要な生活空間となってきたことをうかがわせます。

散策中は雪が降り続いており、十分な見学はできませんでしたが、まだ個々の建造物の修景が進んでいないという印象があります。ですが、私が始めて岩村町を見学した二十二年前（昭和六十三年）と比べると、町の雰囲気がずいぶん明るくなった気がします。

歩いてみると、大きな看板がかかる建築物によく出会います。下の写真「女城主」はその一例ですが、商業が発達していた証拠といえます。山間部に整備された、政治・経済の一拠点、それが岩村町本通りの伝建地区です。

「女城主」は岩村醸造の看板商品。

まだあまり整備されていない町並み。

修景住宅。高さがそろっていません。